

今日はなんだか仕事に集中できなかった。せっかく憧れていた大城さんとカップルになったのに、冴えない感情だった。大城さんは俺の部屋に朝まで一緒にいた。そして「お世話になりました」と言って、笑顔で帰っていった。

俺はそのまま支度して、今日もこの画廊に出勤したのだ。先ほどオーナ―の池田さんが来て、いろいろと話をした。加賀さんとはどうなのか、とか、大城さんの話も出た。

「とにかく岸本さんのことは加賀さんに任せてあるから、彼女に従いなさい」と言われた。俺は元気よく「はい、ありがとうございます」と言っておいたが、池田さんは俺の悩みなんか知らない。

それはそうと、姉は昨夜は帰らなかった。カラオケに行って盛り上がったと言っていたが、それは嘘ではないかと思っている。もしかしたら加賀

さんと……という疑念が俺の中で渦巻いていたのだ。

あの二人は良い雰囲気だった。LINEの交換をしていたので、もしかしたら二人で連絡を取り合って、会っていたのではないのだろうか？ そして昨日の夜は二人で……。

そんな疑いが頭にこびりついて離れなかった。でも何の確証もない。俺の考えすぎかも知れないのだ。俺はぼーっとしていて、お客さんが来ているのに接客することも忘れていた。

そして大城との関係を今後どうするかだ。俺なんて画商としてはまだ半人前だ。とても大城さんの個展などプロデュースできない。まだまだ加賀さんに教えてもらってでないと、企画には参加できないのだ。

不意に、その加賀さんから連絡が入った。

「おはようございます」

俺は元氣よく挨拶をした。

「おはよう。レナ、今日仕事終わってから時間ある？」

「はい、大丈夫ですけど」

ない、なんて言えない。

「じゃあ、その頃に迎えに行くわ。今日から絵を描いてもらうからね」

「わかりました。よろしくお願いします」

何食わぬ顔で連絡してきたが、俺は加賀さんが姉と関係を持っていると疑っているのです、今までのような気持ちで加賀さんと接することができないだろうかと不安になった。

とても微妙な気持ちだ。加賀さんとは心も体も繋がっていると思っていたのだ。それを姉に略奪された思いでいっぱいだった。本当に昨日の夜はどうだったのだろうか？

加賀さんと姉は一緒だったのだろうか？　それが知りたい。

七時近くになって、加賀さんが顔を見せた。

「今日是一片ぐらい売れた？」

「いえ、今日是一片も……」

そう言うとき加賀さんは少し厳しい表情になった。俺はその顔を見て、背筋に汗をかいた。

「一枚も、じゃないでしょ。少しは売っていかないと進歩しないでしょ」いきなりのお説教だった。仕方ない。この人は俺の師匠なのだ。

「はい、すいません……」

俺は元気をなくして頭を下げた。その俺を師匠は冷ややかな目で見る。なんとなく今日は機嫌が悪い。厳しいオーラが出ていた。